

# 医事相談の意義と成果

防衛医科大学校教授

中村 治雄

善光寺山主

黒田 大圓

司会・宝泉寺住職

佐藤 俊明

司会 防衛医大教授に御栄進、おめでとうございます。今日はお忙しいところおいいただき、有難うございました。

中村 いいえ。とんでもございません。

司会 医事相談をはじめられて、もう六、七年になるそうですが、その間の御感想をまずお聞かせいただけませんか。

中村 はい。私、医者として日常、体の具合の悪い人達を相談しているわけですが、医学的に治り得る部分と、医学では治せない、精神的な面で矯正しなければ治し得ない部分のあることを常々感じておりました。

ですから、方丈さんから医事相談をはじめるといふことを伺った時、これはいい企画だし、私どももお役に立つなら喜んで協力したい。けど、それ以上の部分は方丈さんの力を借りなければならぬのですが、さいわい場所がお寺ですから、精神面の矯正には大変結構だと思いました。

何回か実施してるうちに感じたことは、ふだんいろ



いろいろ困りになって実際に治療を受けておられる方もいますが、お医者さんからゆっくり話を聞くことができず、従って疑問が疑問のままいつまでも残っていて悩んでおられる方が多いです。

**司会** 普通診察を受けたんでは中々聞かれませんか。

**中村** いかにも医者<sup>が</sup>忙しそうにバタバタやっているので聞けない。そういう悩みを持った方が来られる。

今日もそうでしたし、前日もそうでした。そういう患者さんに対しては少し役に立っているかな、という気がするんです。

こういう場所では、医師法違反になるので治療はできないんですが、「こういう風になさったらどうですか?」という意味での相談はできる。だから患者さんにとっては、ふだん聞けないようなことが聞ける。そういう意味では患者さんにとってプラスになっているかな、と思いますし、そういう方が年々ふえて来ているように思います。だから方丈さんが医事相談をはじめられて、こういうことで檀家の方々に確かにプラスに



なっていると承知し、できるだけ応援させていた  
だきたいと思っております。

司会 方丈さんのねらいとびつたり合ったわけですね。

方丈 ええ。

司会 先生でなければ方丈さんのねらいに即した医事

相談に当たっていただけなかったかもしれないし、さ  
いわいでしたね。

方丈 ほんとうにその点は有難いことです。人間は、  
精神的な面でいくら素晴しくても、肉体に欠陥があれ  
ばどうしようもない。寺は精神面では力になれるが、  
肉体的な面では医学の力を借りなくてはなりません。  
そこで中村ドクターにお願したわけなんです。

司会 医学には限度がある。ということですが、具体  
的な例をお話いただけませんか。

中村 医者側の限度と、宗教で治し得る部分にもや  
はり限界があるんですね。これはあとでお伺いしたい  
んですが。私どもの側から見ると、たとえば最近ご存知  
のように動脈硬化、特に成人病が非常に多くなり、ま  
たそれなりに教育も進んで来ましたので、胸が苦しく  
なったとか、或いは痛くなった、歩くと動悸がする、  
息切れがしてくるといって、これは心臓が悪いんじや  
ないかということ訪ねてくるようになります。そこ  
でお調べするのですが、実際には心臓は何ともない、

また血圧も高くはないし、いろんな血液検査をしても、レントゲンで見ても、心電図をとっても特に異常はない。ただご自分としてはどうも納得がいかない。何かここに異常があるというふうに思っておられる。そのような方のお話を実際に聞いてみると、確かに心臓病に合う症状、合う所見があるんですが、また全く合わない部分も出てくるんです。それでお医者さんから、「これはもう大丈夫だから、心配しなくていいよ」と言われても安心できず転々となる。「自分としては、こういう症状があるのに、どうして何でもない、たいしたことないといわれるのか。自分では確かに苦しい、痛いんだ」と訴えられる。そういう場合、僕は、コミュニケーションがうまくいってないんだなと痛切に感ずるのです。症状としては確かに心臓病に似た病状なんです。たとえば一時的に血圧の変動が起ることがあります。しかし人間の体は機械と違うので、一時的に頭が重くなったり肩が凝ったりすることがあります。それが本当の病気かどうかということはまた別な

んですが、そうした症状が出て診てもらおうと、「たいした病気じゃない、心配ない」といわれる。しかし、ご本人としては不安で仕様がなない。そこで必要なことは「たしかに重大な病気はもっていない。しかしそのような症状は起こすんだ」ということをよく通ずるように話してあげることです。それをしてあげないと、「自分にはこういう症状があるのに、あそこの医者は何でもないと」という風にとられてしまい、治療がうまくいかなくなってしまふのです。ですから、「何でもありませんよ。重大な事故、故障がなくても、時としてそういう症状が出てくる場合がありますよ」ということを、例を挙げてお話ししてあげる。そしてご本人を納得させることが大事なんです。ところが実際問題としては、時間が少ないとかいうんな事柄がからんでくるんだろうと思うんですが、私共医者が、治し得るものと治し得ないものという事を感じるのには、そういう積極的な領域に入り込んだ部分が非常にやりにくいというか、あるリミットを感じるんですね。そうい

つた時に、或る程度そういった事を理解してくれる宗教家なり、または心理学者なり、精神科医なり、そういった方がいてくださると、もう少し意思の疎通がうまくいって治療そのものも効果を挙げるんじゃないかと思うんです。

それからもう一つは、最近よく問題になっている、いわゆる心身症的なもの、精神がおかしいために体に症状が出てくる。胃カイヨウになってみたり、いろんな事が精神がもとになって起こってくることがある。特に内科の領域でも随分出て来ます。そうなってくと、私ども、今までのようにただ体を治すということではなく、もう少し精神科の領域・心理学者の領域、或いは哲学、宗教の領域にまで知識を持って踏み込んでいかなくちやいけないんじゃないかということを強く感ずるんです。そして僕らとしては、そこに自らの能力の限界というものを時に感ずるわけです。哲学も心理学も、いろんな事に理解を深めなくちやいけないんですが、現実には、心筋梗塞を治してやらなくちや

いけないとか、脳卒中を治してやらなくちやいかなことか次に出てくるのです。だから、そういう意味で、私は、心というものを治してくれ、いやしてくれる人たちの存在を強く必要とするように思いますねえ。

#### — 宗教と医学の提携 —

司会 それで宗教ということが問題になって来ますが、どうも宗教ということが多少誤解されてると思うんです。今の先生のお話に関連して申し上げたい点は、『修証義』の最初に、「生を明らめ死を明らむる」ってことばが出てきますが、仏教では人生ということばは使わないうて生・死ということばを使います。人生ということばは生まれてから死ぬまでの間のこと、生死ということばは生まれる前、死んだ後のことまで含まれるんですね。そうすると、人生問題といった場合は、生まれてから死ぬまでの間に遭遇する問題、生死問題というと、人生そのものの問題というふうにいわれると思います。そこで、宗教というものを考えてみた場合に、人生そのものを問題にする宗教と、人生における問題、つまり、

経験する悩みを解決する宗教と二つあるんですね。

中村 なるほど。

司会 一般に宗教といわれているのは、人生における問題——経験する悩みを解決する宗教——これが一般的にいわれているタイプの宗教ですが、考えてみると、これは本当の宗教じゃないんです。本当の宗教というのは、人間であることの悩みを解決するもので、従って人生そのものを挙げて問題とするんです。生死以上の立場を見出し、その立場によって生き、死してはその立場に還る——この帰依の領域が求められるのです。その結果は生きてよし、死してよし。生きてよし、死んでよしということとは病気の時は病気の時でよし、貧乏の時は貧乏の時でよし、人生のあらゆる場面に幸福を感じることができると。つまり内面的な幸せを得てゆく、安心を得てゆくということが本当なんです。そうするとやはり一番大きいのは病気ですね。日本に一番早くはいって来たのは薬師様、その薬師様をおが

んで病気を治すというタイプの宗教は、今日でもたくさんあるわけです。しかし、病気というものは、お医者さんの診断と、それにもとづく投薬、それから本人の健康管理や環境の調整、そうしたものを合わせて、病気ははじめて治っていくものですが、お医者さんにかかれば金もかかる、あるいは時間をかけないと診てもらえない、診ていただいても、さっきのお話のようにどうも自分の思うような診断をしていただけじゃないか、そういうふうになると、いわゆる苦しい時の神だのみで、神や仏にすがるとなると思うんです。そうした場合、この仏を信じれば、この神を信じれば、病気は治るんだという気持ちでいる場合と、くよくよしている場合と、どっちが体にいいかっていえば、くよくよしない方がいいんだろうと思うんです。その点からいえば、多少の効果はあるだろうと思うんです。しかしそれは本当の効果というものがなくて、本当の健康を得るためには、「やはりお医者さんの診断と投薬と、本人の健康管理、そうしたものが合わさってはじ

めて治っていくと思うんです。

本人の健康管理ということになると、さつきいった人間そのものを問題にする宗教で、本当の安心というものを得なくちやいかんと思うんですが、それがなかなか、今日与えられていないというところに、宗教の側からみると、また大きな問題があると思うんです。

そういつた接点を、善光寺さんで医療相談を開設され、おいでなさる先生と両方から、患者に接していくようにすれば、やがてはその患者は、自分の健康を害したのが起因となって、正しい宗教に求めるようになり、また本当の幸せというのも獲得できるようになるんじゃないかと思うんですがね。

中村 なるほど。私も見ておりますと、先程の例もそうなんです、あまりにもご自分の症状ばかりが気になって、ほんとに馬車馬的にそのことだけが気になって、全くまわりを見ないという方が出てくるんですね。

司会 ああ、なるほど。

中村 ぼくらはそういう時にやはり宗教家が何か、サジェスションを与えてですね。もう少し受け入れてあげるようなことをやってくれると、ぼくらとしてはずいぶんありがたいというような気がするんですね。

方丈 ぼくは、病いの根源はだいたい精神的なものが大半だと思っんです。食べすぎて胃腸をこわしたっていうのは別ですヨ。家庭がうまくいかないとか、姑との間がうまくいかないとか、そういうような悩みが鬱積し、積み重なっていつて体のどこかに症状が出るといふようなものが非常に多いんではないかと思っんです。それは薬を与えることによって治るんだけれども、本当に治ったかっていうと、その心をおさないと病いは完全に治らないというように感じるんです。そこで、今後悩むものがあれば、宗教的な立場のものが合体すると、ドクターのような医学的な立場のものが合体するそうすれば完全に治せる。この結合がうまくできたら世界の最高の理想的な医学というか大光明を見いだせると思っんです。

それからいま一つ。さきほど、ドクターがいわれたように、心臓は全々悪くない、しかし患者さんは何だかおかしいといってくる。そこに何かがある。私は、霊界つてもものを信じてるんです。人間に見えない世界その見えない世界の動きが人間の心身に影響を及ぼすことが多分にあるんです。そういうような世界を今後どういうふうにして解決していくかということ、これは実に大きな問題です。

三世——過去・現在・未来の三世は一つなんです。

昨日今日といえれば過去現在となるが、そういう枠をとれば一つなんです。永遠の時の流れなんです。空気だつて、吸ったつて吐いたつて全体量には増減がないんです。こうした宇宙観に立つてもものを見ていくと、三世はぶつとうしだし、過去現在未来がひとつだということであれば、霊の世界もそうで、死んだ世界も生きている世界もみんな見えるわけです。その霊界の見える立場で患者さんに当っていくつていうことになれば、ガンの末期症状というようなのは別として、精神



的に暗示を与えれば、安楽死をするんじゃないに、安心して死んでいける。死ぬというのは、ただ肉体の息がとまるだけでその命は、おいのちは生きてるんです。宗教家はそこまで大きく目をひらいて、医学的に悪いところは医学の方々に治していただいて、あとは



ぶつとうした世界からみれば、九分どおりぐらいの患者は救われていくと思うんです。そういう世界は、今日明日知るわけにいきませんが、いわゆる宗教と医学というものは決して別のもんじゃないと思うんです。だから今の宗教家は医学に対し、現代の科学に対して大きく目を見開き、医学も大いに宗教的なものをも理解していった時、人類の病気のたいがいは救われると思うんです。ガンの末期症状だつて、ガンになつても安心して死んでいくというものもあれば、死んだ世界じゃない、次の世界で生きかえるんだというようなものがあれば、これほどすばらしい医学はないと思いますね。

——体と心の管理・調整——

司会　ですから、病気になる前、宗教によつて、体と心の調整をしておかなきゃいけないんですが、明治以後の日本ではそれがなされていません。

方丈　そう、そのとおり。だからこれからの宗教家は、ドクターのことを借りれば、予防医学ですね。善光

寺で医事相談をはじめたのはそれなんです。病気にならない。病気になつても最少限度で喰い止めることが大事なんです。暴飲暴食、夜ふかしはいけません。これは、お医者さんがいうよりはむしろ宗教家が言つて、悪いものはお医者さんに取り除いてもらう。宗教家はもつともつとお医者さんの立場を理解し、ドクターのアシスタントのような気持で、身心の調整を指導し、また安心して死ぬる本当の安心を与えることが大切なんです。それを本当に与えないところに大きな欠陥があるんです。

司会　そうです。宗教家は、心の予防医学にいま少し努力しなくちゃいけない。

中村　そうですね。それと関連したことですけども、私はね、予防的な見地から医者として見ている場合なんです。やはり、何かそういう教育が大事だという気がするんです。子供のうちから。いま方丈さんの話でも、こういうふうにしちゃいけないよ、といったりなさるのはお寺へ来て、方丈さんと接して、方丈さん



が一般のお檀家さんに教育してるわけですよ。それと同じようなことを、また医者も一般の人たちに啓蒙的な教育をしていかなきゃならないんです。個人個人のところ、来る患者さんだけを診てるというんじゃないで、もっと医者の方から外へ出て行って、積極的

に教育活動、特に予防医学面での教育活動をやらなくちゃいけないんじゃないかと思うんです。

**司会** 両方にいわれることですね。

**方丈** 問題はお医者さんでも、われわれでも同じことですが、患者さんがくると、もうそれに追われてしまふ。われわれも生活に追われて本当に仏法を説くことが二の次になってしまう。それで今後はやはり街頭に立ってでも「病気になるな」「人間の幸せは、絶対に病気にならないことだ」というような熱烈なものが必要ですね。ドクター方にも、宗家にも、そういう人が出ないとだめですね。それからもうひとつは家庭教育です。これは、おとうさんおかあさんが家の中で、病人が出たら不幸なんだ。だから病気にならないようにと、日常、早寝、早起きを励行させる。そういうようなことを子供たちにうえつけて、その子供たちがさらに子孫につないでいくと、伝えていくということに今こそ本当に目ざめることが大事ですね。

**司会** 体というのは機械と同じで、本当に管理ささう

まくやっていたら、そうめつたに病気になるもんじゃないと思うんです。ところが人間というものは弱くしておろかなものですから、なかなかその管理ができていじよ。

中村 ええ。

司会 そのできないわれわれが、神や仏を信ずることによつて、管理能力を高めていくのが宗教だと思ふんです。たとえば、酒やタバコが体に悪いからやめようと思つたつて、ただそれだけじゃやめられない。だが、信仰の一環として取り組んだ場合、これは簡単にやめられるんです。

中村 ううん なるほど。

——長生きのウルトラC——

司会 そこだと思ふんです。それで、方丈さんと先生の狙いは一致したわけです。そこで先生、今度は話題を変えて、長生きをするには、まずどういうことに心がけなくちゃいけないかといったような話を話していただいけませんか。

方丈 それが一番大事だよ。

中村 結論は、長生きのためのウルトラCつていうのはないんですよ。つまり、特效薬がない。だから、ただいかにその平凡なことを、常識的なことを守れるかということにこつは潜んでいるようなんですね。たとえば、日常生活の中で一番大きな影響力をもつてくるのはお食事だと思ふんです。これは、方丈さんもさきほどもいじくもいわれた、食べすぎちゃあいけないこれはおいしいからと食べすぎると因果応報で別のことがおこつてくる。ほどほどに食べていただく。

司会 もうひとつ大事なことは、飲みすぎちゃあいけない。

中村 だんだん嗜好品のことにはいっていきこうと思ひますが、まず蛋白質—普通はお魚でも、あるいは四ツ足のお肉でもかまいません—そういった動物性のもと、植物性の蛋白質—たとえばお豆なんかです—そういったものとのバランスをとつていただくのが一番いいですね。それから油なんです、油の方も、



お魚の油とか、動物性の四ツ足の油もふくめて、そういう動物性の油と、植物性の油とを、やはりほどほどに。時々はてんぷらを食べるなり、野菜サラダにドレッシングをかけて食べるなり、それからもうひとつは、時々はステーキを召しあがっていただいても結構なんですね。方丈さんも御老師もお好きなんでしょうが、お魚の肉でも、もちろんそれは結構ですし、油でも結構なんですね。ただ、いつまでもお魚ばかりとか、いつまでも四ツ足ばかりとかいうふうになつたりすると、体の抵抗力がちがってくるんですね。それから、菜食主義も大変結構なんです。今でもいろんなところで、インド人なんかもずいぶん分業主義やっておられるわけですが、厳密な意味での菜食主義っていうのは非常に少なくなっている。やはりチーズだとか牛乳だとか、そういうものを召しあがっておられる。鶏の卵とか牛乳はいいんだ。あとは菜食ばかりというようなタイプのの方がふえている。体の抵抗力の面からみても、やはりそういう人たちがいいんですね。植物性の

蛋白質だけというのではやはり多少抵抗力が弱くなる可能性がある。やはり適当にお肉なんかも召しあがっていただきたい。そういう意味では、お坊さんも若干ナマグサになった方がいのではないかと思うんですね。

方丈 そりやそうですね。一方に偏してはいけませんね。あくまでも中道でなくては。

中村 そうですね。

方丈 ドクターの話を聞いて、何か、そういうようなところに急所があるように感じますね、

中村 調味料にしてもお塩もですね、実際にはお塩はそんなに必要なものではない。たとえば夏で汗をかいたり、熔鉱炉のそばで働いて汗だくの人も、塩は実際にそんなに必要なものではない。もちろん、全くゼロにはできませんけども。人間の体はうまくできてまして、塩をとらなければ、かく汗、お小水もみな塩分が減っていくことが多いんです。体の中の塩はうまく適当に調節をされてるものなのです。高血圧とか、この

ごろではガンにも塩分の過剰っていうのはからんでいることがわかってきましたから、特に塩漬けのもの、お魚の干物もそうですね、お肉の塩漬けのもの、それから、おしんこだとか、そういうたものをたくさん食べるとガンをつくる可能性が出てくることわかってきました。それで、今までたくさん召しあがっておられるんだったら、ちよつと減らしていただいた方がいいんじゃないか、全くゼロにする必要はないと思うんですね。そういうような意味で、これもまた中道になつちやうんじゃないかと思えますねえ。コレステロールや何かのことだって、やはりほどほどにイカとか貝とかエビなんかも食べていただいた方がいいんです。それから問題は嗜好品ですが、タバコはどうもいいことはなさそうですねえ。肺ガンにしる胃ガンにしる食道ガンにしる、それから心臓病にしる、よくないですね。タバコはできるだけ減らしていくにこしたことはない。

ただアルコールはですね。おもしろいことに全くぜ

口の人の方が、少し飲んでおられる人よりも死亡率が高いんです。これは人種を問わずですね。もちろん飲みすぎますと、高血圧、ガン、脳卒中、それから肝硬変、そういった病気で死亡率がまたふえるんですね。では全くゼロの人からなぜ心臓病が多いのかっていうのは、今までわかったところでは、いいコレステロールというー体の中に悪いのといいのと二種類あることがわかってるんですがーいいコレステロールがどうも減ってしまう。それがどうも心臓病をふやしてしまうのではないか。だいたい、適量飲んでおられるの方が長生きする。とにかく死亡率が非常に低いです。むかしから「酒は百薬の長」といわれたのは確かだという事が、医学的にも証明されつつあるわけですね。ただ理由が、いまのところまだよくわかっていないところが多いんです。では実際にどれくらいの量かといいますと、だいたいお酒で0.5合から1.5合くらいのところが一番いいんだそうですね。それからビールならば半本から一本半ぐらい、ウイスキーではシングルのグラ



ス一杯からダブル一杯半ぐらいでしょうか。ワインですとワイングラス一杯から三杯ぐらいのところですかね。やはりそのへんがひとつの目安で、一番長生きになるようなお酒の飲み方なわけですね。ですから、たくさん飲んでおられる方は、できるだけそのへんま

で落としていただいた方がいいます。ただ、医学的にはぼくら、今躊躇を感じているのは、ゼロの人に、長生きをするからちよつと飲みなさいといつていいかどうかなんです。お酒というのはついで、一杯が二杯になり、二杯が三杯になるというように、トレーニンングでだんだん強くなりますからね。それは、人を見て法を説かなきゃいけないですけれども。そういうふうにきちんと守れる人であればちよつと飲んでいただいてもいいかもしれないというふうに思いますね。

それから、あとはほどほどに運動していただかないといけないんです。運動していただきますと、エネルギーをつかうということだけじゃなくて、血管を非常にしなやかにしてくれる、血液の流れをよくしてくれるものですから、たとえ血管が一本詰まっても、こんどは他からの血管がじゅうぶん開いてくれて、代償してくれるんです。ですから、心臓病にもなりにくい、脳卒中にもなりにくいのです。適当な運動はどうしてもやっていた方がいいといけません。それから一般の

人であれば、たとえば会社員を対象にした場合、一日に一時間くらいの散歩をおすすめしたい。たとえば、朝三十分、夕方三十分、それができなければ、昼休み一時間歩いてらっしゃいというわけです。ただブラブラと歩くんじゃないで、その時は少し大きく手を振って、汗ばむぐらいに早足で歩いていただくことをお勧めします。それだけでもずいぶん分ちがう。一週間一回ゴルフに行つたくらいでは運動にはなつてないんですね。やはり、絶えず日常くり返していただいた方がどうもよさそうです。

あとは睡眠ではないでしょうか。できるだけぐっすり寝ていただく、そうすることで人間というのはおもしろいもので、悪いこと、いやなことの記憶が少し薄れていくんです。いいことは割にきちんとした引き出しにしまわれて残っていることが多く、いやなこととはだんだんだんだん薄れていくことが多いんです。そういう意味で、ぐっすり寝ていただくことが大事じゃないかと思えます。あと、問題は、少しでも何

かご自分の体に異常を感じ、症状を感じたら、できるだけ早く診ていただくこと。早期発見、早期治療にこうしたことはありません。胃ガンなどは、むかしなら宣言されたらだめだというふうにつながってたわけですが、このごろは治る病気だというふうになってきました。あと動脈硬化、今ぼくは頑張ってる最中ですが、それも、それだってここ十年見ればずい分よくなってしまふ。現に今でも動脈硬化はかなりよくなるというところまで来ましたから。さきゆき医学的に人間の病気についての解決という観点では、ずい分先が見えつつあるという現状にあるのです。できるだけ予防的な意味で、今申し上げたようなことをやっていたら、今度は病気になるはずということになるんじゃないかというふうに思うんですけれど……。

司会 さきほどのおはなしで、酒を全然飲まないより、少々飲んだ方がいいとのことですが、ご婦人はあんまり飲んでないと思うんですが、ご婦人の方が長生きする率が高いというのはどういうことですか、



中村 女性の場合にはどうも、女性ホルモンが影響してる。また、女の人は何でも強いんですけれども、動脈硬化に対しても抵抗性があるんですね。

司会 ああ、そうですね。

中村 それには、ホルモ的な問題が論じられている





んですね。

司会　じゃ女の人は飲まなくてもいいわけですね。

中村　女の人も多少飲まれると、いいにはいいんですね。

方丈　もっと長生きして90・100まで生きたら、世の中却って困るってことも出てくるかもわかんないねえ。

中村　だから寝たきり老人をふやすっていうんじや、社会的に興味がない。できるだけアクティブに動いてくれるお年寄りになってほしい。お年寄りはぼくもよく拝見するんですが、意欲がなくなっちゃうんですね。たいした病気は持っていません。だけど、意欲がないためにご自分で治そうとしないんですね。だからぼくはおとといかな、読売新聞に書かされたんですが、まわりからある程度刺激を与えてやらないといけないんですねえ。できるだけ、ご自分で生きようとする意欲を持たせてあげる。そうじゃなくてもだんだん無関心になって、洋服もだらんとしちゃうし、ひげもぼうぼうにしたりなんてことになりかねませんものでね。特に

また自覚症状も出にくい。たとえば、肺炎になっても熱が出ないとかですね。まわりもそうなっているとあんまり気にしないわけですね。おじいちゃん熱がないからたいしたことないよなんていうようなことで。だけれど実際には肺炎でもうアツプアツプしてるなんてことにもなるわけですね。だから、まわりがある程度気をつけてあげて、刺激を与えるようにしてやる。あと生きようという意欲は、方丈さんや佐藤老師にですね、吹き込んでいただくことですね。

**方丈** そこにいきつくわね。だから、結局は、医学と宗教ってのはもう、ひとつで、合体してね。

**司会** 手を結ばなくちやいかんってことですね。

**方丈** 人類の新しい本当の幸せつてのを、なんか善光寺から考えなくちやいけないという時代に到達したと思うんですが、どうでしょ。

**中村** そういう意味では、たとえば子供たちの登校拒否なんていうのも、あれは宗教家があったらうまくいくんじゃないかと思うんですね。ぼくらも時々相談

を受けるわけですが、精神科医じゃないから、あんまり適切なことは言えませんが、それはよしんば精神科の先生のところへ行っても、今いい名案はないと思うんですね。けれど、登校拒否の子供たちってのは結構いるわけですね。あれを治してくださるのは、ぼくは案外宗教家じゃないかという気がしてしょうがないんですね。

**方丈** 宗教ならね。ありとあらゆるものを救えるよね。これは、もう病気でも、特にガンの末期症状だつて、そのものは治せないけれども、その人たちの心をね。ぼくは、宗教で救えないものはないと思うよね、心の問題なら。だから宗教家が努力しなければいかん。そうでなければ宗教家としての生命がないというようなことを感じますねえ。

**司会** じゃあ、この辺で。

**方丈** 今日は本当にどうもありがとうございました。